

2019. 12. 11 (水)

神の愛

岡田 弥生

愛する者たち、互いに愛し合ひましょう。愛は神から出るもので、愛する者は皆、神から生まれ、神を知っているからです。愛することのない者は神を知りません。神は愛だからです。神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きようになるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました。わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。愛する者たち、神がこのようにわたしたちを愛されたのですから、わたしたちも互いに愛し合うべきです。いまだかつて神を見た者はいません。わたしたちが互いに愛し合うならば、神はわたしたちの内にとどまってくさり、神の愛がわたしたちの内ですべてなされているのです。

(ヨハネの手紙Ⅰ 4章7-12節)

はじめに

振り返るとこれまで50回以上、チャペル講話を担当させていただきました。毎回静かに耳を傾けてくださる皆様を前に、緊張と言いますかいつも畏れをもってこの場に立たせていただきました。

最後のチャペルということで何を語らせていただいて良いのかと迷いましたが、私しか語れないことといえば自分自身のことだと思い、過去を振り返って語らせていただきたいと思えます。

幼い頃

私は幼い時から死、自分の死というものが怖くて、夜皆が寝静まったとき、自分が地球から深淵に落とされる光景を想像し、よく布団の中で泣いていました。そして幼いながらに必死に決意するのです。「やがて死んでしまふはかない者でしかないのなら、同じくはかない周りの人を愛して生きていこう」と。でも翌日になるとそんな決心などけろりと忘れて、自分中心の毎日を重ねていました。そしてミッションスクールの神戸女学院中学に入学しました。自分の意思と言うよりも、通っていた小学校の6年生の担任の先生に受験を勧められたのです。当時担任の先生方の

間で私学に何人入学させたと競争しているような状況でした。私の家は中学から私学に通わせてもらえるほど裕福ではなかったのですが、先生に勤められると親としたら無理をしても受験をさせてあげようと思ったのでしよう。

結果的にミッションスクールの中学校に入学して良かったです。入学して聖書を初めて手にすることができました。これが初めて手にした聖書です。力強く赤や青で線を入れてもうボロボロですが、この聖書の中に「永遠の命」という言葉を見つけ、ただ死で終わる人生ではなく永遠に繋がる命、生きる価値のある人生があることを知らされました。イエス・キリストこそ「道であり、真理であり、命である」(ヨハ 14:6)ということを教えられ、15歳の時に洗礼を受けさせていただきました。

そして(神を愛し、隣人を愛する)愛神愛隣というスクール・モットーのもと中高と過ごし、他大学を受験しようとも思いましたが、もともと文学が好きだったので、そのまま神戸女学院大学の英文学科に進みました。そこで恩師三宅晶子先生と出会いました。先生は同じ大学の出身でクリスチャンであられ、先生にとっては、学問をすることはキリストに仕えることでした。なぜなら学問をすることは真理を学ぶこと。キリストは真理である。故に学問をすることはキリストに仕えることであったのです。授業はすべて英語でなされ、毎回たくさんの課題が与えられるので、学生たちはなんとか三宅先生の授業を取らずに卒業できるよう工夫していたような有様でした。私は他では聞けないような迫力ある三宅先生の授業に聞き入っていました。ゼミも先生のゼミを選択しました。おか

げで夏休みもたくさん資料を求めて図書館通いでした。

教師となる

幼い頃よりずっと教師になることが夢でした。しかし就活に関してはのんきで「きっと神様がふさわしいところを与えてくださる」と思って卒論に集中し、特に就活は何もしていませんでした。すると卒業する年の1月に関係者の先生から直接電話をいただき、4月から大阪女学院で教えて欲しいと要請がありました。恩師の三宅先生は当然大学院に進むのだろうと思っておられたようでしたがっかりされました。でも私は生意気にも先生の元でもう十分勉強した。今度はそれを社会に還元する時だと思っていました。そして3年間大阪女学院で中学生を1年から3年まで持ち上がりで担任をさせていただきました。10歳しか年が離れておらず、教師と生徒が一緒になって掃除をする校風があり、とても密な関係で、学生時代より楽しくやりがいのある時を過ごさせていただきました。そして牧師夫人の紹介でお見合いをして結婚しました。京都の同志社会館での結婚式には大阪女学院中学3年生2クラスほぼ全員参加してくれました。そして家庭に入り、教会学校や英語の個人教授、不定期に通訳や翻訳など結構忙しくしていたのですが、子供もいませんでしたのでこれといって向かう対象がなく過ごしておりました。

「この先私は何をすればいいのでしょうか」と祈っていた矢先、恩師の三宅先生から電話があり、「大学院に戻ってきなさい」と半ば強引に説得され、そしておっかなびっくりで大学院に通い始めました。先生は本当に徹底

的に鍛えるように厳しく接して下さり、文学の醍醐味を教えて下さいました。1988年何とか修士論文を書き上げ、それから2年いろいろな大学で非常勤講師をしながら、論文を書いていた。1990年に滋賀県にあるミッションスクールの短大に専任講師として採用されました。権力闘争や様々なことがありましたが、心は常に学生さんたちに向かっていましたので巻き込まれずにすみました。

西宮の自宅からの遠距離通勤をし、会議などで遅くなると近くのビジネスホテルに泊っていました。家が遠いからといって言い訳はできませんので、かえって誰よりも早く出勤するようにしていました。1995年1月17日火曜日、阪神淡路大震災が起こった時もそうでした。地震は午前5時46分起こったのですが、その時私はすでに身支度を整え、家をでる直前でした。地震のあとは通勤に苦労しましたが、その年には思いも掛けない素晴らしいニュースがありました。それは関西学院大学への就職の話です。

関西学院へ

関学社会学部教員としての応募条件の一つにどこかの大学機関で数年以上勤務した経験のある者といったことが書かれていることを発見したときには、びっくりしました。ちょうど勤務地で6年目を全うしようとしていたところだったからです。「あ、神様はこのように私の一日一日をカウントして下さったのだ」と感謝しました。しかも勤務地では私と同期が6人いて、6人ともずっと講師のまま据え置かれていました。ですから関学から助教授として採用するという内定の

電話をいただいたときの喜びはひとしおでした。

それから24年、いろいろなことがありました。教員といっても人間ですから家族の問題もあります。よく研究者として一番熟しているときに親の介護問題があると聞きますが、私にもありました。また人には言えない理不尽な辛い事も経験しました。誰にも相談できず祈りました。「神様、私はこのような目にあって当然の人間であるのかもしれませんが、しかし今後同じことが起こらないように、どうぞあなたの正義を成して下さい」と。不思議なことに祈りは必ず応えられました。すべてが私の思い通りになったということではありませんが、ああ、これが神様の御心であったのだと納得する答を得ることができました。試練と同時にそれを逃れる道が必ず用意されていました。

最後のメッセージ

さて私の大好きな賛美歌の一つに 'Amazing Grace' があります。お手元の賛美歌451番でしょうか。このチャペルでも時々歌われますね。作曲者は不明だそうです。作詞者はジョン・ニュートン (John Newton, 1725-1807) という1725年、イギリスに生まれた方です。成長したニュートンは、船乗りとなり、様々な経緯の後、黒人奴隷を輸送するいわゆる「奴隷貿易」に携わり富を得るようになりました。当時奴隷として拉致された黒人に対する扱いは家畜以下であり、船内の衛生環境は劣悪であったため多くの者が輸送先に到着する前に死亡したと伝えられています。

ニュートンもまた拉致してきた黒人に対し

て当然のようにこのような暴挙を行っていましたが、1748年5月10日、彼が22歳の時に衝撃的な出来事に遭遇しました。イギリスに蜜蝋を輸送中、船が転覆の危険に陥ったのです。死の恐怖を前に彼ははじめて心の底から神に祈りました。すると船は運よく難を逃れることができたのでした。ニュートンはこの日を転機とし、生活を悔い改めました。そして30歳の時牧師となり、1772年、47歳の時「アメイジング・グレイス」が作詞されたそうです。歌詞の中では、黒人奴隷貿易に関わったことに対する心の底からの悔恨と、それにも拘らず赦しを与えてくださった圧倒的な神の愛に対する深い感謝が歌われています。

そうです。神様の愛は当然の報いとして与えられるのではなく、「こんな者にも拘わらず」与えられる愛なのです。私自身こんな至らない者にも拘わらず神様は様々な変化のあった年月を守り、導いてくださいました。

毎年退職される方々は決まり切ったように「感謝」という言葉を口にされますが、私も本当に端的に思いを述べるとすると amazing grace に対する感謝という言葉しかありません。

さてよく学生さんに「キリスト教とは何ですか」と尋ねると愛の宗教だという答が返ってきます。そうですね、本日打樋先生に読んでいただいた箇所キリスト教のメッセージのエッセンスが記されていますね。9節、10節をもう一度ご覧下さい。

神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きられるようになるためです。ここに、神の愛

がわたしたちの内に示されました。わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。

神が主導権をもって働いておられることが分かりますね。よく信仰は受動的といわれますが、あなたを愛し、あなたに語りかけておられる神に応答するとき神様の愛を知ることができるのです。是非聖書を通し、祈りを通して、この神様の愛を知り、周りの方々を愛する道を選び取っていただきたいと願っています。またもしあなたが孤独で、だれからも顧みられないと思う時があったら、覚えていてください。たとえ四面楚歌のような状態であっても、天の窓は閉ざされてはいなくて、あなたの上には神様の愛が豊かに注がれていることを。これが私の、最後のメッセージです。

〈祈り〉

恵み深い父なる神様、あなたはこのような者に関西学院大学社会学部に導いて下さいました。本当に誇るものもない至らない僕であります。24年間一日一日支え、導いて下さいましたことを心から感謝いたします。どうかここに集われる愛するお一人一人の上にまた関西学院のこれからの上に、あなたの祝福がますます豊かにございますようにと心からお祈り申し上げます。この貧しいお祈りをイエス・キリストの御名により祈ります。アーメン

(社会学部教授)